

「がん予防滞在型リトリート、リボーン洞戸」という挑戦



船戸クリニック 院長
リボン洞戸 代表

船戸 崇史

Takashi Funato

座長 福澤 嘉孝

がんによる死亡数は年々増加の一途を辿っていますが、それは母数としてがんの好発年齢者が多いからであり、実は年齢調整したがんの死亡数は 1990 年代より漸減傾向にあります。これは偏にがん治療の鉄則である早期発見早期治療が功を奏していると言えます。しかし、未だにがん撲滅には程遠いのが実情です。

なぜでしょうか？その理由は 2 つあり、1 つは新たながん罹患者が増えているからであり、とりわけその年齢も若年化していると言われています。もう 1 つが、出来高評価である医療保険制度にあります。つまりがんになれば保険適応にならないからです。

がん撲滅を目指すなら、これからのがん医療はまずがん罹患率を下げる「がん予防（先制）」こそが極めて重要であり加えて従来の保険制度も改変が望ましいと言えますが、今回は前者をメインテーマとしました。

「がんを先制する」です。さらに「がんの先制」には、「初発先制・再発先制・進行先制・死の恐怖の先制」などがあるのではないかと考え、それぞれでシンポジウムを組みました。それぞれのがん先制が深まれば延いてはがん治癒率も上がり、生存期間の延伸へとつながるものと期待できるのではないかと考えます。

実は筆者自身も消化器外科医でありながら、自らもがん（左腎がん）と診断され手術も受けましたのでがん予防の重要性を深く実感しました。さらに、1人称のがん体験を通してがんには「出現した原因、理由、言い分」があると感じ、その言い分をしっかりと聴くことが本当の意味でがん予防になるのではないかと考え、「がん予防滞在型リトリート、リポーン洞戸」を2018年、郷里に開設し「がんを先制する」挑戦をしています。

がん患者へのアンケート調査からがんの言い分も分かってきました。がんは一言も「死ぬ」とは言っておらず、ただ一言「変わりなさい」だけでした。すべからくがん発症以前の生活はがん生活であり、なぜその生き方になったのかを反省し深める中に本来で本当の自分へと戻られる（リボンする）姿をいくつも見させて頂いております。

一番基礎となるものは、人としても最も自然な営みである「良眠習慣・良食習慣・運動習慣・加温習慣・笑い習慣」の5つを提案し、新たな習慣づくりを施設で実践します。さらにがんの言い分を聴く方法として個人的な内省プログラムであるリボンノートに取り組み、セラピストによるヒプノセラピーやスピリチュアルカウンセリングなども効果を上げています。さらに、体の細胞レベルでの免疫活性化をはかる免疫療法から高温度 VC 点滴や水素ガス吸入、還元電子治療、温熱治療や種々の抗がんサプリメントも使用します。

一方、仏教的修行である座禅と断食を共に体験する「座禅断食会」も催行しております。

当日はこうした内容をもう少し具体的にお話しできればと思っております。

略歷

1982.3 愛知医科大学医学部卒
1982.4 岐阜大学第1外科学教室入局 研修医
1983.4 厚生連養老中央病院 外科医員
1984.4 羽島市民病院 外科医員
1990.4 市立美濃病院 外科医長
1991.4 町立木曾川病院 外科部長
1993.2 船戸クリニック 開業 現在に至る

所属团体等

日本消化器外科学会 認定医
日本ホリスティック医学協会 副会長
日本先制臨床医学会 理事
日本ホスピス協会 世話人
西濃在宅緩和ケア研究会 世話人

[illegible]

【メモ欄】